



それはまるでネコを さがすように

それはまるでネコをさがすように1

親戚がこのあたりでお店をやっている、らしい。叔母さんからそう聞いて、ちょっと行ってみようと思ったのはいいけど、肝心の場所が分からないってのはどういうこと。昼は喫茶店で、カフェ、じゃなくて、夜はワインを出すバーだって。よろしくねって軽く言われたけど、よく考えてみたら何してるんだろう…。来てしまったものは仕方ないけど。新しくできた地下鉄に乗って、きれいなホームに感動しながら地上に出るまではわくわくしていたけど、いざ探そうとしたらやっぱりわかんない。あぁっ、無理かなあ。

近くの駅とお店の名前だけで探すなんて、やっぱりだめかなー。ネットで調べてみたけど、ぜんぜん見つからなかった。まあ、世の中にあるもの全部が見つかるわけないよね、って今ならそう思うけど、最初はそんなこと思ってもみなくて、すぐに見つかるものだと思っていた。歩いて探すしかないみたい。みんな知ってるならネットで見つかるだろうし、誰かが何かを書いているはずだ。近所の人たちがお客のスナックとか、そういう感じなのかな。語尾がイタリア語っぽい感じの名前は、どちらかというとおしゃれカフェをイメージさせるんだけど。

sunny day, funny day

ラジオかな。男の人がしゃべっている。秋のカフェにぴったりの曲を...とかなんとか。聞こえてきたのはけっこう派手な感じだけど、これが秋にぴったりなの？秋に似合う曲って言うからしっとりゆっくりな感じかと思ったよ。休みなく流れる音楽はどれもにぎやかだなぁ。ラップみたいなのも聞こえるけど、ヒップホップっていう感じでもないんだよね。そんなに違いがわかるわけじゃないけど、ぼくないことはわかるよ。じゃあ何なのかって言われても説明できないけどさ。たまにはいいよね、自分の知らない音楽も。

台風が行っちゃった後の青空はいいよね。洗われた感じ。空だけじゃなくて、道も電車も風も、どこを切り取ってもさわやかだ。もうすぐ秋が終わりそうで、急に寒くなったけど、こうして太陽が昇りかけているときって、冬がすぐそこにあるなんて信じられない。走っている人は汗だくだ。公園で遊ぶ子供たちとお父さんたちは全力で駆け回っている。道端で絵を描いている人がちらほら見える。イーゼルってなんだかカッコイイよね。イチヨウの木の下は注意して、そりそりと歩く。タクシーの運転手は暇そうにしている。結婚式に出るっぽい人たちはきらきらしている。見習わなくちゃ。こうもあったかいと、街で見かけるひとたちがみんなカラフルだよね。

ぼおっと外を眺めていると、目の前を自転車がゆっくり通り過ぎた。おじいさんがこいで、後ろにおばあさんが座っていた。大丈夫かな、大丈夫かなってほらはらしながら見送ったけど、なんかいいなって思った。おばあさんの表情がすてきだったな。横を向いて座っていたから顔が見えたんだけど、いい顔してたよ。おじいさんがまた頑固な感じに見えるんだ。私のイメージかもしれないけどね。いいから黙って座ってろ、みたいな。すてきだね。

アコーディオンの音がいいなっ。泣きそうだよ。ネットで見かけて気になった人のCDを買ってきたんだけど、ずーっと聴いている。すてきな声。ほんわかしているんだけど、ちょっと低い感じ。落ち着くし、楽しいし、泣きそうになる。アコーディオンなんて聴いたの、いつ以来だろう？音楽の授業かな？中学校の音楽会かな。あの伸びる部分がなんなのかよくわかんなかったし、今でもわかんないんだけど、今なら大好きな音、って言える。歌詞を眺めていると、耳に飛び込んできた歌にまた泣きそうになる。歌詞にも泣きそうだよ。

Some Flowers for Someone

夏だって言うにはまだ早いけど、夏のような暑さが続いている。だから、今日もアイスコーヒーを片手に歩いている。氷がじゃらじゃら鳴る。プラスチックのカップなので「からから」じゃないのがちょっとやだな。グラスの中の氷が立てる、からからっていう音はなんだか気持ちいい。風鈴みたいな感じ。金属のコップに入ったアイスコーヒーを飲んだときに聴いた氷の音は、ガラスともプラスチックとも違って、不思議な感じがした。かんかんとかこんこんとか、鐘を鳴らしているような感じがしたし、重くて、そこにいつまでも残っているようなイメージ。ガラスだと、風が吹き抜けていくような気がする。さわやかだよ。光に当たっていると、音まできらきらしているように聞こえる。

夕方になってからちょっとしたイベントがあると聞いたので、覗いてみた。ドアを開ける前から音楽が聞こえてくる。あれはなんだろう。弦の音だ。バイオリンかな、でもそれっぽくない感じだし。ドアを押して開けると、コーヒーの匂いと一緒に音が私を包む。いい感じ。コーヒーを手にした人ばかり、その視線の先には演奏している人が3人いる。一人は、ギターだ。もう一人は、弦楽器の、バイオリンじゃなくて、けっこう大きい、確か、そうだ、チェロだ。チェロ。入り口に置いてあった紙を見たらわかった。あと、こうやって叩く、打楽器の、えーと、コンガだ。アフリカっていうか荒っぽいイメージだったけど、こうして聴くとそうでもないね。ギターとチェロとコンガ。初めて聴く音楽かも。

プラスチックのカップで揺れる氷の雑音も、街の音に紛れて聞こえなくなる。ちょうどいいね。もともとそんなに気になるわけでもないけど、店の中で飲んでるとついカップを振るから、氷の音が聞こえる。それが好きじゃないから、なるべく外で飲みたい。どうでもいいこだわりだって分かっているんだけど。初めて来た街で、そんなことを考えなくてもいいのに。帽子をかぶり直す。手にしたコーヒーを一気に飲んでしまって、ゴミ箱に捨てる。これでオーケー。ああでもまた後で飲みたくなるかも。また余計なことを考えちゃうかも。考えるな考えるな、飛んでけ。どこかに消えちゃえ。

すっかり暗くなった街の中で、さっき聴いたメロディを思い出して口ずさんでみる。こんなに近くでチェロの音を聴いたのなんて初めてだし、これがチェロだって思いながらちゃんと聴いたのも初めて。すてきだったなあ。弾いている姿もきれいだったし。車の音とか周りの人の話し声とか、夜の街が立てるいろいろな音が混ざり合って聞こえてくるけど、私の中に流れるのはギターとコンガと重なって響くチェロの音。思い出すだけで楽しい。夜にもさわやかな風は吹くんだよね。

転がるりんごはどこへ行く

目の前に綺麗な人が座った。沢山の荷物と、白いコート、そして真っ赤な帽子。手には折りたたまれた紙があって、地図かなと思ったら線がいっぱい引いてあって、「前身ごろ」とか書かれている。足元に置いた大きな紙袋の中身は、大量の布かもね。終点の駅に着いたので、その人の後に続いて降りる。人と人の間を器用にすり抜けて、紙袋もぶつけずに、すーっと先へ行ってしまう。私はあっさり置いていかれる。真っ白なコートは黒いコートの大群に塗りつぶされてしまっているけど、その赤い帽子はすごく鮮やかで、やたらと目立っている。するりするりと動く、赤い帽子。

ゆっくりと電車が止まる。立ち上がってひだまりから離れる。まだ、ネコはそのひだまりでまるくなっている。そこにネコを置き去りにして、電車を降りる。ネコはずっとまるくなって眠るんだよね。うらやましいな。街に出ると、私と同じくらいの年齢の人たちがわらわらいる。ここには何回か来ているけど、まだ道が分かんないんだよね。もともと方向感覚はよくないのに、ぐしゃぐしゃと交差する道が私を余計に混乱させる。人が多い、多い。人混みを避けようとするときっと迷うので、仕方なく紛れる。空から見たら私がここにいるって、わかるかな。

この街に来たときはこのカフェに立ち寄る。毎回、やたらと迷った末にたどり着く。人通りの多いところから少し外れた通りにある、マンションの部屋みたいなところ。窓際の席に座って本を読んだり、外を眺めたり、ネコのことを思い出したり。友達を連れてきたこともあるけど、一人で本を読むのがちょうどいいかな。ここにはギターを背負った人はいないし、熱く演劇論を語る人もいない。少なくとも私はそういう人をここで見たことがない。ちょっと歩けばそれほど格好の人たちがわさわさいるんだけど、このあたりには不思議とない。いつ来ても、どの季節に来ても、ふわっとした時間が流れている。

うわぁ、角砂糖を入れすぎた。取り出すのも気が引けたので、スプーンでかき混ぜてしまう。どろっとしたコーヒーになっている。ひとくち飲んでみると、甘い甘い甘い！コーヒーと水を交互に飲む。子供の時に飲んだ、あの甘い菓みたいで、あの頃は好きだったけど、今となっては飲みたくないなあ。気持ち悪くなる気がしたけど、少しずつ飲めばなんとか大丈夫かな…。そのせいでっていかそのおかげで、本の中でどうでもいい口論を続けるカップルが、どうでもよくなった。ぱたりと本を閉じる。またあとで。

I'm now waiting for breakfast

なんとなく入ってみたお店で、なんとなく一枚のレコードを買ってみた。バッグに入らないそのレコードを抱えるようにして、近くの小さなカフェに入る。カウンターには椅子5つあって、入り口の方にテーブルが3つと椅子が2つずつ置いてある。時間がゆっくり流れているような、ほっとする感じを受けるのはなんでだろう。まあ、寒いところからあったかいところに入ったのもあるかも。昼間は暑いくらいだったのに、夕方になるといきなり涼しくなるんだよね。それと、壁側に大きな本棚がある...ってよく見たら、レコードだ。びっしり並べられている。天井から吊るされたスピーカーからは音楽が流れている。たぶんジャズ。ジャズっぽい。いっぱいあるレコードもジャズなんだ、きっと。

いつもの癖でカフェラテを頼もうとしたらカフェオレしかなかったの、それを頼んだ。どっちでもいいんだけど。国が違うだけの話でしょ？本当は何か違うのかもしれないけど、まあそんなことはどうでもいいよね。カフェオレを待ちながらさっき買ったレコードを眺めてみる。漫画っぽいっていうかアニメっぽいイラストが描かれていて、最初はえっ？と思ったんだけど、当時は普通だったのかな、今ならこういうのもアートなのかなって思うようにした。でもね、よくよく見てみると意外といい感じに思えてくるから不思議。って、単に影響されやすいだけなのかな。歌詞カードはちょっとした本みたいな感じになっていて、歌詞のほかに小説みたいなものが書かれている。

カフェオレはボウルで出てきた。熱いのでお気をつけください、って言われたけど、熱い！本当に熱い！片手じゃ持たないから両手で、しかも熱くない縁のところを持って、おそるおそる、そおっと口をつける感じでちょっとずつ飲んだ。レコードそっちのけでボウルと戦っている。コーヒーってこんなに熱かったっけ。確かあまり熱く淹れちゃダメなんじゃないんだっけ、でもでもカフェオレだからいいのかな。牛乳を温めているからこんなに熱いんだ、きっと。でも熱すぎるよ。

ちょうどいい温度になってきたカフェオレを飲んでいると、お客さんが入ってきて、私の隣の隣に座った。すると、お酒を頼んだ。そういえばメニューにリキュールって書いてあったな。昼はカフェで夜になったらバーになるってことか。もうそんな時間なんだ。暗くなるのが早くなってきたから、別にいいのかな。時計を忘れたから時間を確認することもできない。ケータイを出すのも面倒だから、もうなんでもいいや。するとその人がレコードについて聴いてきた。なんだかこれについて知っているみたい。そういう世代の人なのかな。私は特に何かを知っているわけじゃないからなんとも言えないんだけど、なんだか結構詳しいようだ。どうしてこれを買ったのと聞かれたので、衝動買いですと答えた。

くるりとまわる時間の中で

大きなビルがあちこちにあるのに、人影はまばら。休みだから？雨が降りそうだから？改札を抜けて階段を駆け上がって地上に出た瞬間、あまりにも少ない人通りに拍子抜けしたほど。待ち合わせに遅れて少し走った自分がちょっと恥ずかしい。かろうじて見かける人たちは、なんだかリラックスしている。土曜日の夕方だからかも。単に自分が焦っていただけのことかもしれないな。私を見下ろしている無口なビルたちを、私は歩きながら見上げてみる。

ゼロが4つ並ぶとき、カチッという音が聴こえる、ような気がする。中学生のときに買ってもらったデジタルの目覚まし時計を思い出す。1分経つ度に数字の書かれたカードがくるっと回って、その回る音が今でも記憶に残っている。ちょっと夜更かしして、夜の12時になるときに、ぼんやりした頭で聴いていたカチッという音。今でも思い浮かべる。その音を合図に、いろいろなものが夜にもぐりこんでいく。私は眠いとまだ寝たくないの間をふらふらと漂う。

曇っているから、暗くなるのも早い。気付くと、天井の照明がちょっと弱くなっていた。外が暗くなっただけかと思ったけど、照明も暗くなっている。外にあるテーブルにはキャンドルがあって、小さな火が揺れている。寒くないの？キャンドルを囲むように座っている人たちを見ると、思わず心配になった。冬のオープン・カフェなんて、何かの罰ゲームなんじゃないかと思う。

高校生のころはひとつの本を寝る前にベッドの中で何度も何度も読み返したなあ。一度読み通してからは、枕のそばに置いてあった。なんとなく適当に開いて、開いたページから読み始める。眠くなってきたら閉じるんだけど、それより先に自分の眼が閉じることも多かった。気づいたらあちこちが折れていたし、そのせいかページもカバーもぐしゃぐしゃになってしまった。いつからか、本以外のものに興味が出てきてからかな、あまり読み返すこともなくなったけど、どこにどんなことが書いてあったかは思い出せる。

外に出る。雨は降っていない。マフラーをぐるぐる巻いた。冬は早く過ぎ去ってほしいんだけど、あまりにも冬っぽくないと、それはそれで寂しいよね。春が待ち遠しい、なんて感覚もないかもしれないから。いっつも優しいよりは、たまに優しい方がいい、ってのと似てる？似てない？やたらと物静かなビルと、ちょっと寒そうなキャンドルの火。ここにもう一度来ることはあるのかな。真夏にでも来れば、印象は変わるかもしれない。その頃にはいろんなものも違っているかもしれないし。

Sunlight Parade

赤いバスが通り過ぎる。ロンドンで見たバスを思い出す。あの時も確かこの季節だったな。寒かった。帰ってきてからテロが起きたってことを知って、なんか他人事とは思えなかった。少しの間しかいなかったんだけど、いろんな風景を覚えていたから。窓の下を歩き交う人たちがみんなおしゃれに見える。おしゃれな街だー。あれは何だろう。白いものを抱えている子がいて、たぶん楽器のケースだと思うんだけど、ギターとかそういうのじゃない気がするな。もっと小さくて、軽そう。こんなところで楽器を持っている人を見るなんて、意外。

最近チェック流行ってるの？赤が多いよね。なんか昔っぽって気がするんだけど、ぐるっと回ってまた流行るから、それかな？高校生とか中学生のイメージなんだよね、チェックって。私は違ったけど、制服のある高校ってチェックばっかだよ。私服でもチェックのマフラーならまあまあそれなりに、って感じだったから、意地でも巻いてやらなかった。何がいいとか悪いとかそんなのもわかっていたわけじゃないから、何の意味もなかったかもね。さすがに今ならもうちょっと冷静に見られるし、好きなものは好きだった思うし、言う。どうやって使ったらいいかはやっぱりまだ悩むけど。お店で手にとっても、店員さんに説明されても、どこかでひっかかる。まだまだなんだな。

あっちには孫をおんぶしてるおじいちゃん。がんばれおじいちゃん。嬉しいんだろうな。こればかりはどこも変わらないんだろうね。生まれたときにはもうおじいちゃんはいなかったからわかんないけど、いたらどうだったのかな。こっちには着物を着た女の子が手を引かれて歩いている。楽しそう。白タイトの男の子はつまらなさそうにしている。普段とは違うものを着てるってのが嬉しくて、私もはしゃいでいたな。特別な日みたいだね。今でもそれは変わらない。でもこういう感覚って男の子にはないのかな。

あれ、音楽が聞こえる。トランペットとかサクスを吹いているおじさんたちがいる。なんだろう。楽器を持っているだけで意外だなんて思っていたけど、すぐに演奏している人まで見ちゃった。これってもう意外とかそういうことじゃないよね。私が知らなかっただけかな。この瞬間から、私の中でこの街は音楽の街になった。どうやら終わりの方だったみたいで、近くに来たときには演奏は終わっちゃった。それでも私は拍手を送る。目の前をトラックが横切る。何なのって思って見てみたら、ピアノ運送って書かれていた。へえ、こういうのでピアノを運んでるんだ。知らなかったー。

jellyfish

友達に連れられて来たバーみたいなところで、ライブが始まった。女の子がギターを弾きながら歌っている。騒がしい街の中を抜けてきたからなのかな、とても静かな感じに聞こえる。そっとささやくような。お酒も入っているから、寝ちゃいそうだけど。歌が終わって私は拍手する。ギターをぼろぼろ弾きながら、話し始める。マイペースに話している。おもしろいなー。友達の部屋で話してるって雰囲気だね。気ままに、思いつくままに話が変わって、戻って、またどこかに行く。ふわふわとしていて、楽しいな。

いいから飲んでみなよって言われても無理だよ無理だって、そんなに強くないの知ってるでしょ。こういうのってすごくて、強い人がかっこよく飲んでるイメージだね。なんで今日に限ってそんなに勧めるのよ。なんかあった？無理だって。それとも珍しく酔ったのかな。だからー。顔は赤いんだけど、それはいつもどおりで、話している感じもいつもと同じように、しっかりしているんだけど。わかったよ、ちょっと。大丈夫かな...お、意外と、いいかも。あれ、飲めるかも。あ、でもやっぱり熱くなってきたかな。でも、想像していたほどじゃない。ゆっくり飲めば飲めそう、ってこれもう私のものなのね。まあいいや。ミントの香りかな。いい香りがして、なんか気持ちいい。

さっきのささやくような声が嘘だったかのように、はっきり歌う。ちょっと驚いた。優しく弾いている感じだったギターを、今度は力いっぱい弾いている。その曲を歌う前に話してくれた内容がけっこう真面目というか重かったのもっと静かな曲をやるのかなと思ったけど、違った。なんか、突き刺さる。私は目の前の音楽に釘づけになっている。どこかで見た、昔のミュージシャンを思い出した。ギターを抱えて歌っている姿。何かをぶつけるような感じだけど、派手じゃない。その人は男の人だったけど、なんとなく、目の前で歌っているあの人に、なんでか、姿が重なった。

コーヒーが飲みたくなったので、いつもなら電車を乗り換えるところを改札を抜けて、駅前のカフェに入る。窓際の席からは駅の前に広がるロータリーが見渡せるんだ。見下ろすと、たくさんのタクシーがぐるぐると回っている。夜は忙しいよね。どれも別のタクシーのはずなんだけど、同じ車が何度も何度も回っているように見える。バターになりそう。大きな窓ガラスは一日の終わりを映している。少し上を見ると、駅のホームが見える。いくつも電車がやってきて、止まって、また出ていく。こんな時間なのに、たくさんの人が降りて、乗って、また降りて。もうすぐ私もそのうちのひとりになる。電車に乗って、降りて、歩いて、ドアを開ける。

それはまるでネコをさがすように2

どこにあるのー。とりあえずといった感じで地図を持ってきたけど、やっぱり役に立たない。そう思ってすぐにしまおうとしたけど、思いとどまった。このまま何も持たずにうろうろしてきょろきょろしていたら絶対に怪しまれるよね。カモフラージュしなきゃ。いや、別に悪いことしているわけじゃないけど。それにしても、看板があつたりガラス張りになっていれば分かりやすいのにな。下手に隠れ家的だったらどうしよう。隠れなくていいのに。

真夏にこんなことをやっていたら間違いなく倒れる。急に訪れた秋っぽい涼しさに助けられたけど、相当歩き回ったせいか、今はけっこう暑い。途中から地図に、歩いたところを赤ペンでぐりぐり色をつけてみたけど、どんどん赤くなっていく。見落としてるってことはないよね。いつもならおもしろそうな雑貨屋とか服屋があつたらちょっと入ってみたりするんだけど、今日はそれを抑えて...なんてことはなく、やっぱり入っちゃう。出てからまた歩いて、気になるお店を見つけて、また、ついつい。そんなことを繰り返している。いつになったら見つかるんだろうなあ。太陽がどんどん西に傾いていく。



それはまるでネコをさがすように